

アメリカ地理雑感

愛知教育大学
寺本 潔

久しぶりにアメリカ中西部を訪問した。もう10年も前になるが、文部省在外研究で10ヶ月間滞在したミネソタにも立ち寄ることができた。さらに、初めて西海岸を旅できる幸運にも恵まれた。地理学を専攻するものとしていろいろなことを感じた。まさに地理雑感に過ぎないが、印象深かったことを思いつくまま書き連ねてみたい。

1 近代都市シカゴの魅力 景観と人の迫力

今回の旅の始まりはシカゴだった。人口290万人。名古屋よりも少し大きい都市である。しかし、迫力は名古屋の数倍あったように感じた。その理由の一つに高層ビル群があげられる。昨年、私費調査でニューヨークを訪れたがそのときにビビッと感じた迫力に似ている。都心に林立する200メートル以上の高さのビル群をまじかに見て人間の作った構造物自体の持つ存在感を印象深く感じたのである。有名な建築家によりデザインされたビル、とくに円形の露出型の駐車場には驚いた。らせん状に上って行って駐車するのである。しかも外から丸見えである。まるで色とりどりのミニカーが収められたようにも見えた。さらに、昔映画館で見たことのあるシカゴのギャングたちが闊歩していたかのようなクラシックでモダニズムあふれるビル街など、「高さ」からくるなんともいえない迫力感が私にとっての第一印象である。

アメリカこそ広大な土地があるので横に広いビルでいいのではないかと、どうしてあんなに高いビルが必要なのだろうかと素朴に感じられる方がいるかもしれない。都市地理学ではそのことに対しては中枢管理機能という一種の都市システムで回答している。つまり、垂直にさまざまな業種や機能が積み重なり狭い都心のエリアに多機能が集まっていることの経済的情報交流的メリットの方を重視するからである。

シカゴで泊まったホテルの前はシカゴ川であった。そこには河川クルーズ観光の乗り場があり、多数のアメリカ人観光客が昼夜船に乗って川から眺める都心観光を楽しんでいた。水面から眺める高層ビルの景観は現代アメリカを象徴する眺めである。この眺めはミシガン湖に突き出た岬からも遠景で楽しむことができ、都市を一望に眺めるというシカゴ観光の愉しみが満喫できた。

初日は高層ビル群という人工物からくる迫力に感動したが、2日目は早朝から訪問した穀物取引所で、人からかもし出される迫力に感動した。体育館ほどもある会場が、いわゆる穀物メジャーとよばれる世界の穀物取引の現場である。2000人にも及ぶバイヤーと買い手、取引所職員などが瞬時を惜しまず、両手を掲げ取引に走り回っている。血相を変えて買いに走る男、パソコンに取引価格を即座に記入する女性。トウモロコシや大豆、小麦などにみられる主要穀物の先物取引の世界である。ここにはシカゴのもう一つの「人が発する迫力」という魅力がある。

2 懐かしいミネソタ

1990年に私は文部省在外研究でミネソタにいた。ミネソタ州はハートランドとも呼ばれるアメリカの心の州である。ミネアポリス空港に降りたとき懐かしさがこみ上げてきた。赤茶けた水がとうとうと流れるミシシッピー川の風景。冬は零下20度Cにも冷え込